

「終わり良ければすべて良し」という、よく知られていることわざがあります。

この言葉は、中世の劇作家シェイクスピアの戯曲（ぎぎょく）「All's well that ends well」を和訳したものだといわれています。

この物語の主人公は、医者の娘のヘレナです。ロシリオン伯爵バートラムに恋をしますが、身分の違いを理由に相手から拒絶され、思いが叶わずにいました。

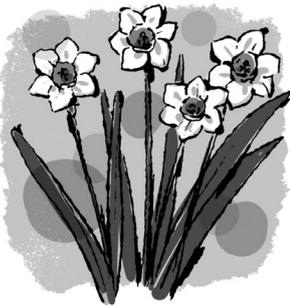
しかし、ヘレナはあの手この手を使って、最終的には相手と結ばれました。両思いになる過程はどうであれ、最終的に良い結果になったので「終わり良ければすべて良し」なのだという内容です。

その言葉の意味を上辺だけで理解しようとする、「終わり良ければ、動機や途中経過などは問題にならない。物事は結果がすべてだ」と捉えてしまう人も多いのではないのでしょうか。

しかし、シェイクスピアはあえて物語を複雑にして、困難を乗り越えようとする主人公の姿を鮮明に描写しています。結末に至るまでの過程を詳細に描くことにより、結末と同様に、実は過程も大切であると示したかったのかもしれない。

例えば、ヘレナはバートラムと結ばれるという確固たる目標をもって行動していました。なぜなら、最終的な目標を明確にすれば、成功に向かって粘り強く行動を続けることが可能になるからです。

また、ヘレナの思いが成就したことにより、その結果だけがクローズアップされて



## 終わり良ければ すべて良し

いますが、最後に良い結果を迎えることができたならば、それまでの努力や苦労には意味があり、価値があったともいえます。

私たちも、職場や家庭の中で苦難に直面しても、「最終的に」良い結果になればよいと受け止めることができれば、「諦めずに取り組もう、頑張り続けよう」といった前向きな気持ちになれるのではないのでしょうか。このように「終わり良ければすべて良し」という言葉は、現代においても多くの場面で通用する普遍的な教訓を私たちに教えてくれているのかもしれない。

『万人幸福の栞』第十三条に「見事な死にようをした人は、見事な一生を貫いた人である」と記されています。

「見事な死」とはいわば結果です。しかし、その結果は「見事な一生を貫いた」からこそ得ることができたのです。

つまり、「見事な一生を貫く」とは、日常生活の一分一秒を疎かにせず、ひたむきに生きることによって人生は一層輝きを増し充実した締めくくりを迎えることができることを表わしているのではないのでしょうか。そのためにも、日頃の小さな出来事を疎かにせず、しっかりと向き合い、日常生活を完全燃焼したいものです。

今月は「一年の締めくくり」の月です。一年間お世話になった人に挨拶し、身の回りの道具や場所などに対し、感謝を込めて整理・整頓・後始末を行ないましょう。

まもなく迎える二〇二五年の新春を、すっきりと爽やかに迎えたいものです。